

(令八前)

国

語

(問題部分1～10ページ)

注意

- ① 解答はすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。
- ② 海洋政策科学部の受験者は、一(1～6ページ)に解答し、二と三(7～10ページ)には解答しないこと。
- ③ 経営学部の受験者は、一と二(1～8ページ)に解答し、三(9～10ページ)には解答しないこと。

国語 (海洋政策科学部) 八〇点

国語 (経営学部) 一二〇点

国語 (右の二学部以外) 一五〇点

— 次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。(配点八〇点)

個人が所有しているモノのような何かとして能力はイメージされている。能力が個人に帰されることでその社会的な側面が捨象されるという点に関する批判はこれまででもなされてきたが、さらに重要なのは、個人が所有するモノのような何かとしてイメージされることで、それが交換可能なものとして観念されるという点である。これは、能力主義における「能力」が、実際にかがでることそのものではなく、交換の論理を前提とするある種の説明概念である可能性を示唆する。

^(ア) 実際に何が「できる」ことは「能力」と同じではない。どのような人でもある活動の文脈においては「できる」けれども、別の活動の文脈においては「できない」。例えば、ギターは弾けるが泳げないとか、数学は得意だが料理はからっきしだめとか、若いときには速く走れたが年をとって歩くのも難しくなるといったことがある。あるいは車椅子の人は歩けなくても、エレベーターがあれば一人で移動することができるし、歩ける人でも空は飛べないが、飛行機を使えば空を飛んで別の場所に移動することができる。つまり、全く何もできない人もいなければ、あらゆることができるという人もいない。できる／できないというのは存在の問題ではなくて、状況や環境、使えるリソース、活動の文脈の問題だからである。「できる人」「できない人」がいるのではなく、「できること」「できないこと」^(a)があり、さらには「できるとき」と「できないとき」というのもあるわけだ。

できるということと能力の区別のケイフをたどると、アリストテレスのエネルギーとデユナミスの区別にまで至る。エネルギーは「現実態」「実現態」と訳されるもので、実際に観察できる行為や現象である。それに対し、デユナミスは直接知覚されえない「可能態」「潜勢態」であるが、そのものに内属しているとされる潜在性や性向であり、一定の条件のもとで発現する。例えば、種子は植物となり花を咲かせるデユナミスであるが、土や水がないとエネルギーとしての植物のかたちをとって成長し花を咲かせることはない。この区別に基づくなら、能力はデユナミスであり、実際になされた行為やその結果として形をとったものがエネルギーだと言える。問題は、デユナミスをもっとして知覚の(したがつて評価の)対象とすることはできず、その対象となるのはあくまでエネルギーであり、しかもその状態が発現するためには一定の条件が必要だという点である。できる

／できないということが状況や環境、活動の文脈の問題だというのは、この条件の形成という部分に関わるからである。つまり、能力の形成や実現という話は、こうした条件を整える社会的な次元の問題だということになる。この点をふまえた上で私が主張したいのは、能力主義の中核的問題は、能力そのものが個人に帰属するのか、社会的に構成・形成されるのかという点とは違ふところに存するということである。それが市場の問題にほかならない。

具体的な例で考えてみよう。例えば、なぜAさんには一〇〇〇万円の報酬が支払われるのに、Bさんには一〇万円の報酬しか支払われないのだろうか。端的に言うところこれは市場における価格の差であるが、価格というものは、市場を介することで適正化する側面と、逆に差が極端に広がる側面とがある。後者の例は、稀少価値きせうちやくのある物に対して購入者が競合し、価格が吊り上がっていくようなケースである。この場合、複数の買い手が競合する商品は値がどんどん上昇するが、買い手がつかない商品の価格はますます下落することになる。ここから言えるのは、対価の違いは、労働力商品売る側の問題というより、それを購入する側に由来することである。

こうしたいわばオークション的状况があるにもかかわらず、市場においては等価交換が行われているという信念が広く共有されているなら、対価に対して何らかのものが交換されているはずだという推論が働く。そこで等価交換されているはずのものこそ「能力」というわけである。その人が貴族だからとか、男性だからという理由でより高額な俸給をもらうのには納得できない人も、能力が高いからという説明には納得してしまう。そして自分がこれだけの給料しかもらえないのは、あるいはそもそも就職できないのは、能力がオトb)っているせいだと自分を納得させる。ここには次のような前提があると考えられる。近代化された社会では、人は何者であるか(属性)によって評価されない。機会の平等というかたちでスタート地点がそろえられたゲームにおいては、人は何をなすかによってのみ評価されなければならない。その評価に応じて対価をもらうのは正当である。貴族であろうと非労働者であろうと、何もしていない者が対価をもらうのは公正ではない。ここには、なしたこととその対価とのあいだの等価交換という論理が認められるが、それは経済的であると同時に道徳的な論理でもある。対価の大幅な格差がある場合にもこの論理は持ち出されるが、実際になしたことのみでこの格差を説明することには無理があるので、そこに「能力」という可能態が持

ち出されるわけだ。

厄介なのは、「能力」にまつわる⁽¹⁾こうした言説が、現実の不平等を正当化するだけでなく、希望をもたらすものでもあることである。なぜなら、交換の原理は基本的に対等な者同士のあいだで働くものだからである。交換においてやりとりされるものは等価とみなされる。そこから交換にあたる人々もまた等価であるとみなされるのである。王と臣民が何かを交換することはできないのであって、対等な同じ人間だという前提が市場交換を成り立たせ、その交換の論理によって人は対等だとされる。そこに格差があるとすると、それは当人がより少なくしか与えなかったからである。だが、少ししか差し出せなかった「能力」は、幸いなことに努力によって高めたり増やしたりすることが可能だとされており、そして当の交換自体が負債を返済し、より大きな対価を受け取る可能性を^(c)ホシヨウしている。能力を身につけ、高めさえすれば、それに応じた対価をあなたも受け取ることができるのです！

だが、労働力商品を売るという場面を考えると、そこにあるのは売り手と買い手のあいだの絶対的な非対称性である。売り手は、なぜ自分が買われたのか、あるいは買われなかったのか本当は知らない。にもかかわらず、それは能力のせいだと考えるよう仕向けられる。ここから見えてくるのは、能力主義における「能力」とは、対価の差というかたちで現れる配分の不均等を等価交換の論理によって説明するために用いられる概念ではないかということである。これは、能力が個人のものか、社会的に形成されるものかというレベルの話ではない。実際に何か持続的・反復的にできることに対して日常的に用いられる「能力」についての語用と、能力主義における「能力」の用法は区別されなければならない。それは、現にある社会的富の配分の不均等を、市場における交換の論理によって説明するという語用論の文脈で捉える必要がある。だとするなら、能力を実体視し、新たな能力を身につけたり高めたりすることを推奨するよりも、何かができたりできなかったりすることと社会的な富の配分をまず独立の問題として区別した上で、どのような仕方配分するのが公正なのかを考えるのが筋であろう。能力主義の問題は、何よりもまず、能力の問題と配分の問題とを一緒にしてしまうところにある。そして、「能力」による解放や逆転の可能性にしがみつくことで、ますます能力主義の神話が機能することになるのだ。ここに能力主義の希望と絶望がある。

当たり前のことだが、社会は市場ではない。社会と市場が一致しない以上、市場における等価交換の論理を社会的配分の論理とすることはできないはずである。だが、能力主義の普及が示しているのは、市場における等価交換の論理を社会的配分の論理とすることが公正だという感覚が多くの人に共有されているということではないだろうか。

こうした交換の論理が人々の生のリアリティに浸透していることを示す徴候は、近年よく使われるようになった表現に現れている。それは、「元気をもらいました」「勇気をあげたいと思います」という類の表現である。かつて、元気や勇気は「湧いてくる」ものであって「もらう」ものではなかった。元気や勇気は内から湧いてくる生命力のようなものだったのに、今や個人が所有して交換することが可能なモノであるかのようにあげたりもらったりされている。ここに、経済学的な市場交換の論理が多くの人々に身体化され、現在のリアリティとモラリティを形成している様子を垣間見ることができよう。

こうした交換の論理にもとづく「負債」の言語が、人類の歴史において不平等な諸関係を正当化するために使われてきたことを明らかにしたのは人類学者のデヴィッド・グレーバーである。浩瀚な『負債論』のなかで彼は、負債にまつわる人類史を語ることを通して、市場の言語がいかにして人間の生活のあらゆる側面に浸透するようになったかを再構成してみた。グレーバーによると、負債とは「カンスイにいたらぬ交換」である。そして交換とは、等価性にまつわるやりとりのすべてである。そこに厳密な等価性があるわけではなくても、等価性に向かおうとするやりとりの不断のプロセスが交換なのである。より広くは、人類学で互酬性(reciprocity)と呼ばれてきたような関係性であり、そこには、公平、均衡、公正、対称性といった正義の感覚が含意されている。人類学者が贈与交換と捉えてきたやりとりは、カハイを介した交換でもなければ、厳密に等価なものを返礼するわけでもないが、それでもそこに貸しと借り、優位さと負い目のあいだの経済的かつ道徳的な均衡感覚があり、広い意味での交換と考えることができる。

しかし、とグレーバーは問う。「本当にすべての正義は、互酬性に還元可能なのだろうか?」。そこで人類の社会の多様性のかなに見られる共通した経済／道徳の原理として、交換の他にグレーバーが見出すのが、ヒエラルキーとコミュニティである。ヒ

エラルキーにおいては、上位下位の境界ははっきりと引かれ、関係性を規制する枠組みがすべての関係者に受け入れられているため、習慣と先例の論理にしたがって機能する。王制、身分制、カーストなどはこのヒエラルキーの論理を基軸としている。対してコミュニズムとは、「各人はその能力に応じて貢献し、各人にはその必要に応じて与えられる」という原理にもとづくあらゆる関係性である。これについてグレーバーは、共産主義という体制の問題ではなく、どのような社会においても、資本主義のまっただなかにおいてさえも現に存在するものであり、これこそが人間の社交性の基盤であるとして「基盤的コミュニズム」と呼ぶ。

これらの原理は、異なる社会や体制の原理ではなく、どこであつても共存し絡み合っている異なる諸原理である。したがって、すべては交換の論理に基づいているから公正なだと主張したり、あるいはコミュニズムの原理のみにもとづく社会を作ろうとしたりすることはどちらも間違っている。だが逆に言うと、たとえ資本主義社会であつても、そこに市場交換の論理とは異なる原理を基軸とする共同性を作り出すことは可能なのである。それは例えば、コミュニズムの原理を中心とする社会的連帯協同組合のような実践のなかに具体的に見出すことができる。

ただ難しいのは、グレーバーが指摘するように、公正な社会を想像しようとするとき、人は往々にしてすべてが均衡している優雅な幾何学をイメージしないわけにはいかないという点である。市場というものもまた、誰もが同じ動機と知識を持ち、同じ利己的計算の上で交換を行う自己充足した世界を想像することから生み出された数学的モデルではない。にもかかわらず、人はそのモデルにしたがって現実を説明し、道徳的判断を下そうとするのである。「能力」にもとづいた公正な交換が行われているという市場のモデルは、こうして多くの人々に現実を説明する優雅な神話として受け入れられるのみならず、まさに私たちの「現実」そのものを構成することになる。能力主義の言説は、現代の祭司たちによって繰り返し語られることで、私たちの「現実」を日々支え、再生産しているのである。

(松嶋健「交換の論理と「能力」より」)

〔注〕 ○アリストテレス——古代ギリシアの哲学者(紀元前三八四～紀元前三二二)。

○語用論——言語は使われる文脈や状況に応じて異なった意味や効果をもつという観点から、言語表現を分析する研究。

○互酬性——個人あるいは集団間で、贈与された側が返礼として相手に贈与を行うことで、相互の関係が構築・維持されること。

○デヴィッド・グレーバー——アメリカ合衆国の人類学者(一九六一～二〇二〇)。

問一 傍線部(ア)「実際に何かが「できる」ことは「能力」と同じではない」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部(イ)「能力」にまつわるこうした言説が、現実の不平等を正当化する」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(ウ)「貸しと借り、優位さと負い目のあいだの経済的かつ道徳的な均衡感覚」とあるが、それはどういう「感覚」か。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(エ)「能力」にもとづいた公正な交換が行われているという市場のモデルは、こうして多くの人々に現実を説明する優雅な神話として受け入れられるのみならず、まさに私たちの「現実」そのものを構成することになる」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。はつきりと、くずさないで書くこと。

二 次の文章は、中国の逸話集を翻案した物語の一部である。これを読んで、問一～五に答えなさい（設問の都合で本文を改変した部分がある）。（配点四〇点）

昔、徳言といふ人、陳氏と聞こゆる女にあひ具したりけり。かたちいとかしげにて、心ばへなど思ふさまなりければ、互ひにあさからず思ひかはして年月を経るに、思ひの外に世の中乱れて、ありとある人高きも卑しきも、さながら山林に隠れまどひたりければ、人知れずもろともあひ契りけり。我も人もいづかたとなく失せなん後、おのづから世の中静まりて、またもあひ見ることありなんものを、その程の有様をばいかでか互ひに知るべきと聞こえさするに、女の年ごろ持ちたりける鏡を中より切りて、おのおのそのかたがたを取りて、月の十五日ごとに市にいでして、この鏡の半ばを尋ねさするものならば、必ずあひ見て互ひにその有様を知るべしと言ひつつ、いといたうち泣きて別れ去りぬ。その後、この夫恋しさわりなくおぼえて、いたづらに月日を過ぐすままに、いかなる人に心をうつして契りしことを忘れ

まず鏡われて契りしそのかみの影はいづちかうつりはて

c し

らんと、胸の苦しさを抑へがたくぞおぼえける。

かやうに思ひやりけるにしも、色かたちのなまめかしくはなやかなるにやめで給ひけん、時の親王にておはしける人に、限りなく思ひかしづかれて年月を経るに、ありしには似るべくもなき有様なれど、この鏡のかたがたを市にいでしつ、昔の契りをするのみにかけて、世の常は下燃えにてのみ過ぐしけるに、鏡のわれ持ちたる人として尋ねあひて、男女の有様互ひにおぼつかなからず知りかはしつ。女これを聞きけるより、おぼえずなやましき心地うち添ひて、うつし心ならぬけしきを見とがめて、親王あやしみ問ひ給ふを、さすがにおぼえて、しばしば言ひ紛らはしけれど、しひて宣はすれば、わびしながらありのままに聞こえさせつ。親王これを聞き給ふに、御袖もしぼりあへず、あはれにいみじくおぼされけるにや、よそほひいかめしきさまにいでしたてて、昔の男の下へ送りつかはしたるに、徳言限りなくうれしきにつけても、まづ涙ぞさきだちける。

契りおきし心にくまやなかりけんふたたびすみぬ中川の水

いやしからぬ有様をふり捨てて昔の契りを忘れざりけん人よりも、親王の御情けは、なほたぐひあらじや。

(『唐物語』より)

(注) ○徳言——徐徳言。古代中国で、ある国の王族に仕えていた男性。

○ます鏡——よく澄んだ鏡。

問一 傍線部①④を、それぞれ分かりやすく現代語訳しなさい。

問二 傍線部(A)とあるが、誰がどのようなことに「胸の苦しき」を感じたのか。五〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(B)の内容とそれに対する作者の評価を、六〇字以内で説明しなさい。

問四 空所 a、c には、助動詞「ぬ」の活用形が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えなさい。

問五 『唐物語』は、平安時代から鎌倉時代頃に成立した作品だと考えられている。次の中からこの時代の作品でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

イ 『伊勢物語』

ロ 『雨月物語』

ハ 『源氏物語』

ニ 『竹取物語』

ホ 『大和物語』

三 次の文章は、故郷へと急ぐ旅人の心情を歌った民間歌謡(樂府)をもとに、清代の文人が自分の経験を語ったものである。これを読んで、問一〜五に答えなさい(設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある)。(配点三〇点)

樂府 江陵去揚州、三千三百里。已行一千三、所余二千

在。愈俚、愈妙。然讀之、未有不失笑者。余因憶下再使西蜀

時上北歸、次新都、夜宿、聞諸僕偶語曰、「今日歸家、所余道

路無幾何矣。當酌酒相賀也」。一人問所余幾何。答曰、「已行

四十里、所余不過五千九百六十里耳」。余不覺失笑、而復悵

然有越鄉之悲。此語雖謔、乃得樂府之意。

(王士慎『分甘余話』より)

〔注〕 ○江陵——地名。湖北省にある。

○揚州——地名。江蘇省にある。

○一千三——ここでは千三百里を示す。

○俚——俗っぽい。田舎っぽい。

○妙——素晴らしい。

○憶——思い出す。

○西蜀——現在の四川省成都あたり。

○新都——地名。成都市北部にある。

○僕——使用人。

○悵然——悲しみ嘆くさま。

問一 傍線部(a)「偶」、(b)「幾何」、(c)「耳」の読み仮名を全てひらがなで書きなさい。送り仮名がある場合はそれもつけること。現代仮名遣いでよい。

問二 波線部①「未有不失笑者」を全てひらがなで書き下しなさい。現代仮名遣いでよい。

問三 (一) 波線部②「当酌酒相賀也」を現代日本語にしなさい。

(二) なぜ「賀」すのか、その理由を二〇字以内で書きなさい。

問四 波線部③「余不覚失笑」とあるが、「余」が「失笑」した理由を簡潔に説明しなさい。

問五 波線部④「此語雖諠、乃得樂府之意」とあるが、「樂府之意」を得るとはどういうことか。五〇字以内で説明しなさい。